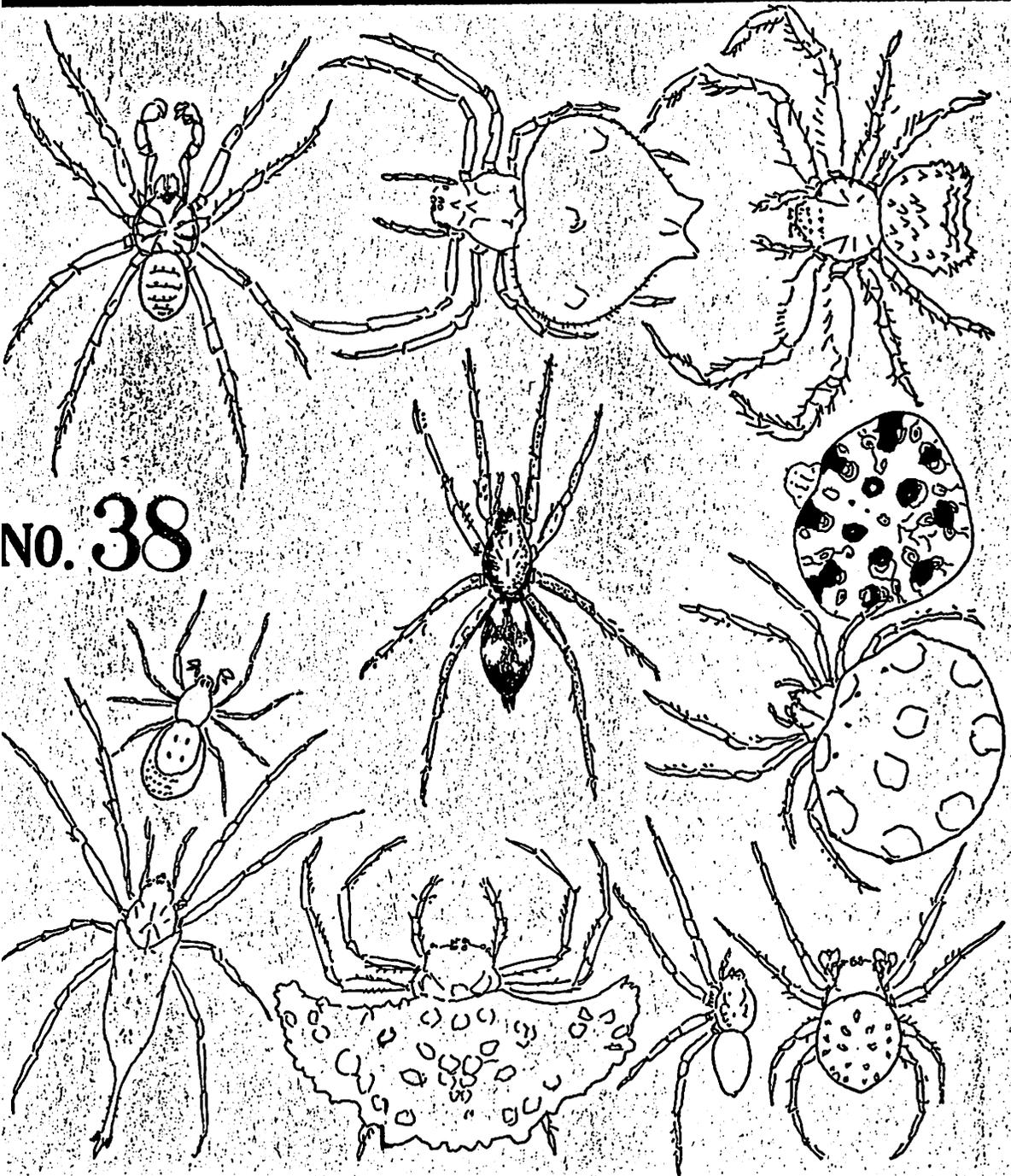


東京蜘蛛談話会誌

KISHIDAIA



No. 38

東京蜘蛛談話会 東京都日野市豊田1.896 萱嶋泉方(TEL.0425-81-7128)

目 次

特 集 1973年クモ学界10大ニュース	(1)
蜘蛛 (Spinne)	西 郷 啓 造 (4)
ベートトラップのクモ	山 川 守 (6)
不老入洞記	松 本 誠 治 (8)
クモ小観察(2) 夏の景信山にて	新 海 明 (8)
コムラウラシマグモの越冬巣	熊 田 憲 一 (9)
一週間だけ異常な網を張ったクモ	山 川 守 (10)
オニグモの飼育について〔日記をまとめつつの報告(1)〕	萱 崎 泉 (12)
紹 介 水野寿彦著 「日常の生態学」	(13)
DRAGLINE	(11)
会 報	(13)

1973年 クモ学界10大ニュース (国内)

1973年のクモ学界での特筆すべき事項をチマタの例にならって10大ニュースとしてとりあげてみました。月を追っていますのでどれが第1位という訳ではありません。

その1 2頭目のワクトツキジグモ八重山で採集される

世界のクモの中でも超珍品と言われるワクトツキジグモは、南方の島々でさえも数頭が記録されているにすぎず、日本では今まで宮崎県で築地満男氏が採集したのが唯一の記録であった。ところが本年春、玉川大学学生小倉直樹氏が石垣島において幼生を1頭採集した。我国2頭目の快記録である。
(萱嶋 泉)

その2 ヤマキレミアミグモ八ヶ岳と富士山に多産

前号のキシダイア (№37) に高野伸二氏によってすでに報告されているが、7月の14日と15日に相次いでヤマキレミアミグモの多産地が発見された。14日は長野県八ヶ岳において古浜隆、新海栄一の両氏が、翌15日には富士山五合目で高野氏がそれぞれ発見したもので、いずれも50頭を超える集団で、その付近では他のクモの網が見つからない程であったとのことである。これまでの産地は長野(八ヶ岳)・岐阜(御岳)・北海道(大雪山)の3ヶ所であった。(松本誠治)

その3 ソメワケトリノフンダマシ続けて2個体採集される

7月30日鹿児島県大隅半島のほぼ中央部の山の中を歩いていた古浜隆氏は、ふと見上げた崖の途中の葉裏にクロトリノフンダマシとおぼしき影を見つけ慎重に採集したところ、クロトリではなくトリノフンダマシ属中では最も珍しい黒と赤に染め分けられたソメワケトリノフンダマシであった。さらに8月1日薩北地方の山間部でススキの葉裏にいたソメワケトリを新海栄一氏が採集している。鹿児島ではトリノフンダマシよりソメワケの方が多いのではないかと思われる程の連続しての発見であった。(松本)

その4 エゾトタテグモの住居発見

8月14日北海道阿寒湖西岸の十條製紙社有林の林道の崖地で、クモトリマナコを光らせていた松本誠治氏は、クモ学界32年間の謎と言われていたエゾトタテグモの住居をついに発見した。住居入口はカネコトタテグモのものと変わらず、大きなもので10mm強あり、3mm程の小さなものも点々とあった。ただ、住居は崖地の長さ2m位の間にみられるのみで、その両側の続きには探しても見つからなかった。土質が砂と粘土まじりの粗粒なのでくずれやすくなっている。今までは住居が発見されず、幼生や亜成体が落葉中から採集されていたので、成体になるまでは落葉中で生活するのか、とも思わ

KISHIDAIA №38 1974, May.

れていたが、今回幼生の住居も見られたことで、本種の移動分散の方法、落葉中への侵入の要因等が今後の研究課題になるであろう。(新海栄一)

その5 東亜蜘蛛学会第5回大会大阪で開かれる

5年前東京で第1回を開催してから毎年欠かさず実現されて来た大会が、時期を変更して8月26日大阪で開かれた。参加者は第1回の東京大会に次ぐものであったが、内容は多くの分野に及び、クモ学の大会といえる盛大なものであった。実行委員並びに協力者の方々の労をねぎらいたい。(萱嶋)

その6 Telemidae のクモ日本の fauna に入る

8月26日開催された第5回クモ学会大会において、八木沼健夫博士により Telemidae のクモが日本に生息していることが報告された。このクモは従来ヤマトエンコウグモ *Merizocera nipponica* としてマシラグモ科に入れられていたが、精査したところ書肺がなく気管が2対あるということから転科される結果となったものである。これで日本産のクモの科の数は47となった。なお Telemidae のクモはアフリカ(タンザニア)・ヨーロッパ(フランス)で確認されていた。また大会席上、関口見一博士から書肺の無いことはクモにとっては分類学上極めて重要であって、書肺と気管の発生過程は異なるから、前対の気管について調査してみる必要があるという意見があった。(松本)

その7 和名ドクグモ、コモリグモに

同じく大会において、一昨年よりアンケート等で意見を調査していたドクグモの和名変更の件が、総会にはかれて、学会の権威と責任においてコモリグモに変更するという結論を発表した。以後、Lycosidae の科名とこれに含まれる全てのクモの名をコモリグモに統一することになった。(新海)

その8 キジロオヒキグモ東京で発見される

キジロオヒキグモは関東地方では1969年に伊豆高原で植村利夫博士によって採集されて以来、神奈川(山川守氏)、千葉(国見裕久氏)と毎年記録され、北上のきざしをみせているが、本年9月8日ついに東京に出現した。採集地は景信山小下沢で、山川守氏の採集によるものである。同地域は新海栄一氏が10年間に150回も調査をし続け専用フィールドの感がある所で、その間一度も発見されなかったキジロオヒキが、そこへは初めて採集にきた山川氏に採られたことを聞いた新海氏のくやしがり方は筆舌には尽くしがたいようである。(小野展嗣)

その9 マメイタイセキグモ千葉県に現わる

3年前に山梨県層雲峡に現われたマメイタイセキグモはその後採集記録を見なかったが、本年9月23日、千葉県清澄山において新海明氏によって発見された。「崖のススキの間に糸を張りその途中に卵のうを2つ吊しその卵のうの下側に張りついていた。卵のうはトリノフンダマシの卵のうにとげ

をつけたような形で、遠くからではトリノフンダマシのものと見間違り程である。」とのことである
(小野)

その10 クモ観察会でオダカグモ多数発見

10月10日、東京クモ談話会の採集・観察会が催された。場所は神奈川県飯山観音である。その折、今まで5回(大阪、小豆島、高知、宮崎、長野)の記録しかないオダカグモが多数発見された。はじめに見つけたのは小野展嗣氏で、それがオダカグモと判明するや参加者全員がクモの生息していた場所にかけてあたりを調べはじめた。とくに東京でキジロオヒキを発見し意気上がる山川守氏は、今度は自分の本拠地ですてやられたため執念で探しまわり、ついに2頭目を発見した。さらに栗原輝代子さんも見つけ、結局、参加者7人全員が発見することとなったのである。しかも卵のうを持っている個体、仔グモと一緒にいるものなどたくさんあり、今まで知られていなかった生態が観察されカメラにおさめられた。当日の参加者は少なかったが収穫は多大であったと言えよう。(新海)

以上のように今年はワクドツキシグモをはじめとして、10年に1度というような発見が目白押しという感があります。今まで稀薄な存在とされていたクモがこうして各地で多く発見されるということは、クモ愛好者が増えそれぞれ精神的に活動していることを示すものとして、たいへん喜ばしい限りです。最後に12月27日、ササラ会・多足類懇談会及び本会の合同例会が開催されたことを番外として記しておきたいと思います。なお選考は文末()内の4人で行いました。

〔紹介〕 水野寿彦著「日常の生態学」

「クモ」と題にないと、つい見のがしてしまいが、多くの方々がクモについては興味を示している。本書もそのうちのひとつであると思う。著者の長い研究活動の中での折々のことを随筆したものでクモが載っているのは次の各章である。○ゴキブリ退治の功労者：アシダカグモ ○日食：オニグモ・アシナガグモ ○タデ食う虫：カリバチとクモ ○カエルの腹の中：クモ類 ○ほら穴の世界：コシロカネグモ ○おはようハエトリグモ：シラヒゲハエトリ この内、ほら穴の世界の中のコシロカネグモは、サンロウドヨウグモだと考えられるが、他の章も興味ある生態学の内容にあふれている。肩のこらない本であるのでおすすめしたい。又著者、水野寿彦氏は京都大学の教官時代、学生舟川忠司氏にハエトリグモのテリトリーと順位制について指導された方であることとはご存じだと思う。

水野寿彦(1972) 日常の生態学 i-x+1-171 pp. 築地書館(東京) ¥580 (虎)

KISHIDAIA 438 1974, May.

蜘蛛 (Spinne)

西郷啓造

朝起きて庭を眺めると、蜘蛛の巣に朝露がきらめいて、吹く風にユラユラと、動かされている有様は、なんとも言えない好い気持になる。

こうした蜘蛛の巣、すなわち太陽が東の空を紅色に染めはじめるところや、あるいは夕陽迫ってあたりもようやく暗くなるころに、蜘蛛がセッセと網を張ってできた巣を、ドイツ語では „Altweiber sommer“ とか „Fadensommer“ とか、あるいは „Sommerfäden“ と、いつている。文字通りに日本語訳にすれば「老婆たちの夏」とか「糸の夏」とか、「夏の糸」となることはいうまでもない。またドイツ語では、この蜘蛛の巣を、単に „Sommer“ (夏) とか、 „fliegender Sommer“ (飛びつつある夏) とも呼んでいる。 „Altweibersommer“ は一方においては、寒い冬も間近かに押し迫ってくる十月の末によく経験する。その年の名残りの暖い「小春日和」ともいべき日を意味するとともに、他方においては晩夏に見る空中に浮動していたり、または樹の茂みなどにかかっている繊細な小蜘蛛の糸を意味するが、英語では „fine as gossamer“ などと蜘蛛糸の美しさを礼賛している。これは露の降りる十月ごろから目につくといって、「Go-summer の訛りであろう」という人もあれば、「いや、これはイタリア語の „Goss-Amira“ から出た „fairy-cotton“ (化け綿) または „magic-geese-down“ (魔術の鷺毛) の意味だよ」と Volksetymologe ならぬ学者の詮議立てもなかなかぎやかである。ところで、暦のうえて十月といえば、秋なのに „summer“ を用いているのは、元来、インド・ゲルマン語系の最初の言葉には、季節を表現するものとして「夏」「冬」のふたつだけあって、「春」「秋」のふたつは後代にいたってはじめてできたものであるからである。それはさておき、学者の詮議立ても結構であるが、物は見ようひとつで、むかしは酒倉にわざわざ蜘蛛を放って網を張らせて、この酒は古いものだ。蜘蛛の巣を看板につかった狡猾な酒造店主があったという話も挿話として加えておきたい。

さて、ドイツでは蜘蛛の中でも、とくに、「十字架蜘蛛」(Kreuz spinne) と呼ばれるものは、聖母の使いの小動物として、燕と同じように、家の中における「幸福をもたらす小動物」(Glückstierchen) としてたいせつに扱われている。また蜘蛛の巣は、とくに家畜小屋内のそれは、魔女を近づけない「魔女よけ」とされている。また蜘蛛は天気の前言者とみなされていることも、周知のことである。

次に『源平盛衰記』には、

「康頼入道申しけるは入道が家には蜘蛛だにもさがりぬれば、昔より必ず悦を仕候が今朝の道に小蜘蛛の落ちかかり候ひつるに云々」

とあるように、朝蜘蛛は縁起がよいが、夜蜘蛛はきらいだ、という人はわが国には多いが、ドイツにはそれと反対にこんな詩がある。

„Spinne am Morgen, Bringt Kummer und Sorgen;
Spinne am Abend, Erquickend und labend.“

これは朝蜘蛛は有難くないが、夜蜘蛛は「幸福をもたらす蜘蛛」と見られるからであろう。また『和漢三才図会』には、

「有人善亡者 七月七日取蜘蛛網 置衣類中 有効勿令病人知」

と、蜘蛛が健忘症にとってご利益のあることをも挙げている。蜘蛛が「幸福をもたらし」、「ご利益を施し」、また「縁起がよい」すなわち、„Glückstierchen“である。という考え方においては、東西その軌を一にしているとはいえ、ドイツにおいても蜘蛛をきらい人がはるかに多いのは、蜘蛛の形態がしからしめることと思う。そこで意地の悪さと、有毒さとを兼ね合せて、喧嘩好きの老婆を„eine alte Giftspinne“ともいっている。„Sommerfäden“を„Altweibersommer“というのも語源は、その辺にありうらうと思う。

× × ×

上記は、杏林大学のドイツ語の教授であった故西郷先生の御著「文学のふるさと——ドイツ民族とその民間信仰」（朝日出版社・1971年・650円）の69～71ページに掲載されたものの全文です。御著が出版された後、本誌に転載をお願いしたところ、先生は快よく承諾して下さり、その上、増補する必要があるから新しく原稿を書くとおっしゃられたのですが、実現を見ずに、今日に至ってしまいました。この文章をそのままにしておくのはあまりにも残念なので、ここに全文を載せた次第です。

先生の御著を拝読し、とても為になったことは、季節を表わす言葉は、以前には夏と冬しかなかったということです。このことを頭に入れておくと、「Gossammer」の名称も、日本で「雷迎え」と何のくいちがひもなく理解されます。gossammerの語源は、行く夏（本当は秋）を代表するイギリスの田舎の風景であると考えるのが自然のように思えます。しかし、蜘蛛がセッセと網を張ってできた巣を同じように言うのは、かなり乱暴な言葉のように思えますが、その責任はドイツ人にあるわけです。また「十字架蜘蛛」（Kreuzspinnen）の正体が気になります。人目につくコガネグモ科のクモでしょうが、斑紋がKreuzなのか、かくれ帯をKreuzに見たてたのかいろいろ想像できます。Die Tierwelt Deutschlands第23巻の72ページに「Kreuzspinne」が出ています。Aranea diademaに与えられた名称です。このKreuzはクモの斑紋なのがわかりました。（このAranea diadema Linné, 1758はAraneus diadematus Clerck, 1758です。）このクモが燕と同じように幸福をもたらすといわれるのは、正体不明であった伝染病の媒介者（ハエ・カ）を捕えてくれることを人々は知っていたのでしょう。夏、クモを採集に行ったとき、旅館の窓に網を張っているオニグモは正に「夜の魔女」である蚊（のメス）をとらえてくれる「魔女よけ」にあたります。

クモを、有益であるが、きらいとしていることは、1970年の談話会例会で、大河内・久保田の両氏が発表したことと一致し、興味深いものを感じました。（松本誠治）

KISHIDAIA 第38 1974, May.

ベートトラップのクモ

山 川 守

昆虫のベートトラップ調査において、昆虫と共に多くのクモが採集される。

筆者は、昭和46年と47年に日本自然保護協会が行なった、都内各地でのベートトラップ調査の際、採集された真正クモ類を見る機会にめぐまれたので、その目録を発表したいと思う。

なお、これ等の標本を見る機会を与えて下さった、国立科学博物館付属自然教育園の桜井信夫先生に御礼を申し上げます。

- | | | | |
|----|---|---------|-------------|
| | I CTENIZIDAE | トタテグモ科 | |
| 1 | <i>Latouchia typica</i> (Kishida) | | キシノウエトタテグモ |
| | II ATYPIDAE | ジグモ科 | |
| 2 | <i>Atypus karschi</i> Doenitz | | ジグモ |
| | III THERIDIIDAE | ヒメグモ科 | |
| 3 | <i>Dipoena castrata</i> Boes. et Str. | | ボカシミジグモ |
| 4 | <i>Steatoda cavernicola</i> (Boes. et Str.) | | ハンゲツオスナキグモ |
| 5 | <i>Stemmops nipponicus</i> Yaginuma | | スネグロオチバヒメグモ |
| 6 | <i>Theridion sterninotatum</i> Boes. et Str. | | ムナボシヒメグモ |
| 7 | <i>T. tepidariorum</i> (C. Koch) | | オオヒメグモ |
| | IV LINYPHIIDAE | サラグモ科 | |
| 8 | <i>Ostearius melanopygius</i> (O. P. Cambridge) | | スングロサラグモ |
| | V MICRYPHANTIDAE | コサラグモ科 | |
| 9 | <i>Oedothorax insecticeps</i> Boes. et Str. | | セスジアカムネグモ |
| 10 | <i>O. tokyoensis</i> (Uyemura) | | コブアカムネグモ |
| | VI TETRAGNATHIDAE | アシナガグモ科 | |
| 11 | <i>Dyschiriognatha tenera</i> (Karsch) | | ヒメアシナガグモ |
| | VII AGELENIDAE | タナグモ科 | |
| 12 | <i>Agelena opulenta</i> L. Koch | | コクサグモ |
| 13 | <i>Coelotes exitialis</i> L. Koch | | ヤチグモ |
| 14 | <i>C. luctuosus</i> L. Koch | | メガネヤチグモ |
| | VIII PISAURIDAE | キシダグモ科 | |
| 15 | <i>Dolomedes sulfureus</i> L. Koch | | イオウイロハシリグモ |
| | K LYCOSIDAE | コモリグモ科 | |
| 16 | <i>Lycosa coelestis</i> L. Koch | | ハラクロコモリグモ |

- | | |
|--|-------------|
| 17. <i>P. T-insignita</i> (Boes. et Str.) | ウツキコモリグモ |
| X THOMISIDAE カニグモ科 | |
| 18. <i>Oxyptila decorata</i> Karsch | キハダカニグモ |
| 19. <i>Xysticus croceus</i> Fox | ヤミイロカニグモ |
| 20. <i>X. saganus</i> Boes. et Str. | オオヤミイロカニグモ |
| XI SALTICIDAE ハエトリグモ科 | |
| 21. <i>Hasarius doenitzi</i> Karsch | デーニツハエトリ |
| 22. <i>Jotus abnormis</i> Boes. et Str. | チャイロアサヒハエトリ |
| 23. <i>Myrmarachne japonica</i> (Karsch) | アリグモ |
| XII CLUBIONIDAE フクログモ科 | |
| 24. <i>Phrurolithus komurai</i> Yaginuma | コムラウラシマグモ |
| 25. <i>Orthobula crucifera</i> Boes. et Str. | オトヒメグモ |
| 26. <i>Trachelas japonicus</i> Boes. et Str. | ネコグモ |
| XIII GNAPHOSIDAE ワシグモ科 | |
| 27. <i>Herpyllus striatus</i> (Kishida) | トラフグモ |
| 28. <i>Zelotes pallidipatellis</i> (Boes. et Str.) | マエトビケムリグモ |

以上のように、このベートトラップ調査において、13科24属28種の真正クモ類が記録された。今回記録されたクモの中でも特に個体数の多かったものを上げてみると、オオヒメグモ、スソグロサラグモ、セスジアカムネグモ、コブアカムネグモ、ウツキコモリグモ、オトヒメグモなどがあり、特にスソグロサラグモとオトヒメグモは都内全域に非常に多く棲息していることがわかった。

また、これ等の種以外に、幼生のため種名のわからないものが数多くあり、造網性のもではヒメグモ科、サラグモ科、コサラグモ科、タナグモ科、徘徊性のもでは、コモリグモ科、カニグモ科、ハエトリグモ科、フクログモ科、ワシグモ科などを上げることができる。

現在、我国において、微小なサラグモやコサラグモ、地上徘徊性のコモリグモ、また、そのほか、落葉中の数多くのクモの調査がまだ遅れており、この方面での本格的な調査が望まれている。

トラップは、クモにおいては単なる落とし穴的な意味しかもたないものと思われるが(例外：キシノウエトタテグモは腐肉よりも、糖蜜のトラップの方が多く採集される傾向がある)、かなり多くの個体が採集されるということも事実である。

今後、各地で本格的なクモの調査が行なわれるものと思われるが、このトラップは、ベルレーゼファンネルと共に、微小な種や徘徊性の種類を採集するための手段として、もっと活用されるべきものであると思う。

不老入洞記

松本 誠治

1月27日(勿論今年の)、新海・榎田両氏にさそわれて奥多摩の不老鐘乳洞に採集に行ってきた。車で西園分寺駅から2時間程のところなので意外に近い。バス停留所「不老」の近くに車を置いて、昼食・ヘルメットなど入洞用具をかついで出発。観光ルートではないので行きつくまでが大変。以前にも一度同じメンバーで入洞しているので気は楽だったが、今回の方が雪の積っているだけ苦労が大きかった。キツネだかタヌキだかあるいは野良犬だかの足跡を再び踏みながら歩く。長靴の中に雪が入る。前回は1時間半程でついたのが、あと200m程のところ、目印を見失いウロウロした。結局、強引に雪の中を登って洞を発見。ここでも新海氏の記憶の良さに驚かされた。洞に着く間に休んだところで、マダラスジハエトリ(♂亜成体)とエキヌハエトリ(♀成体)を採集。2種共に杉の皮をはいてとった。自分の大きさと同じ袋状の越冬住居を作っていた。日当りよい斜面には糸がもう引かれている。よくみるとクモももう出ている。ムナボンヒメグモの幼生であった。網を張っているわけではなかった。

洞の入口で先ず昼食をとり(この弁当は大変おいしかった)自動車整備服に身を固め、ヘルメットをかぶって用意は完了。このツナギは大変具合がよかった(ガソリンスタンドで手に入るらしい。なおヘルメットの出所は、不問にしてほしい)。鉄のはしごを登らないと入口にいけな。入口につくとすぐに垂直な登り、あとは登ったり降りたり、ころがったり、はったりで、体をまっすぐにたてることできない。前回にはかなりぬれていたところも今回はかわいていた。ぬれるのは雪溶け後かもしれない。七転八倒しながら、あたりをみまわしてみつけたものは、へんなカマドウマ(種名は知らない)にへんな双翅目の昆虫(蚊ではないように思える)。それに、りっぱな *Nesticus* の雄の成体、りっぱなアケボノユウレイグモ、それにサラグモの一種、コアシダカグモの幼生であった。*Nesticus* の雌も3個体発見したが幼生であった(雄は2個体共成体なのに)。

再び七転八倒しながら入口にたどりつき、鼻水をすすりながら車までひきかえした。この鐘乳洞の名前、「不老」とはよくいったものだ。年寄りには入れない。毎日入っていれば大変な運動で若返る。若返りたい方は、新海氏か榎田氏に連絡をとるといいかもしれない。(1974・1・30記)

クモ小観察(2) 夏の景信山にて

新海 明

採集地：都下八王子市小下沢林道

採集日：1970年8月12日

○オナガグモの幼生がヒメグモ科のクモ(種不明)を捕食しているのを観察。

○トリノフンダマン♀成1発見。

○全般的に幼生が多かったような気がする。

フタスジサラグモ・オナガグモ・マネキグモ・サツマノミダマン（もう少しで成体）・ジロウグモ・ナガコガネグモ・ハラビロミドリオニグモ（幼1）・ヤリグモ・オオトリノフンダマン・アリグモ・コハナグモ（1）ウズグモ・トラフカニグモ（1）・イシサワオニグモ（♂亜成1）

○成体だったのは

ヒメグモ（卵のうをほとんどつけていた）・オオヒメグモ（卵のうがふ化していたものが多かった）オオシロカネグモ・トガリオニグモ・スジアカハシリグモ（1）・タニマノドヨウグモ（1）・ギボシヒメグモ（卵のうがふ化しているものが多かった）・アシナガサラグモ・トリノフンダマン・デーニツハエトリ・クサグモ・キララシロカネグモ・トラフカニグモ（1）・ヨツデゴミグモ。

○フタオイソウロウグモ クサグモの網にて採集。

○ヤリグモがサラグモ科（種不明）の網にとまっているのを見かけた。

○トガリオニグモが網上にいるのを1つも見かけなかった。全て葉の裏にひそんでいた。

○ヤマトカナエグモの卵のう1つ発見（まだふ化していなかった）

コムラウラシマグモの越冬巣

熊 田 憲 一

コムラウラシマグモは、落葉中をよく徘徊しているフクログモ科の一種です。このクモを1974年1月21日、丹沢において採集しましたが、それはいままでの落葉中からではなく、下記に述べる様な所より採集しました。

丹沢一ノ沢付近は天然林が保護されており、その中でもブナ林は有名です。林道沿いのブナのウロコ状に浮き上がった樹皮の下から、キハダカニグモ・コマツエンマグモや多くの昆虫の観察採集の折、ハエトリグモの越冬巣らしきものを見い出しました。糸をはがすと中からコムラウラシマグモの雄が一頭出て来ました。これがこのクモの越冬巣であることは一目で分かりました。直径約8mmの円形で頭部を左にして入っていました。糸はハエトリグモのそれと同様にやわらかく、かつねばり気のあるような収縮性を持っていました。外気が寒いせい（このすぐ後に雪が降り始めました）クモはじっとしていましたが、この越冬巣には出入口らしきものを見い出すことは出来ませんでした。観察の不十分さからかも知れません。

クモは飼育中、瓶のフタがはずれ逃亡してしまいましたが、室内で撮った写真からもこれがコムラウラシマグモであることが分ります。常日頃落葉中から見つかり、樹上等では見つけることのなかったこのクモの、この様な越冬態を見たのは初めてでしたので、ここに観察記録として報告いたします。

KISHIDAIA №38 1974, May.

一週間だけ異常な網を張ったクモ

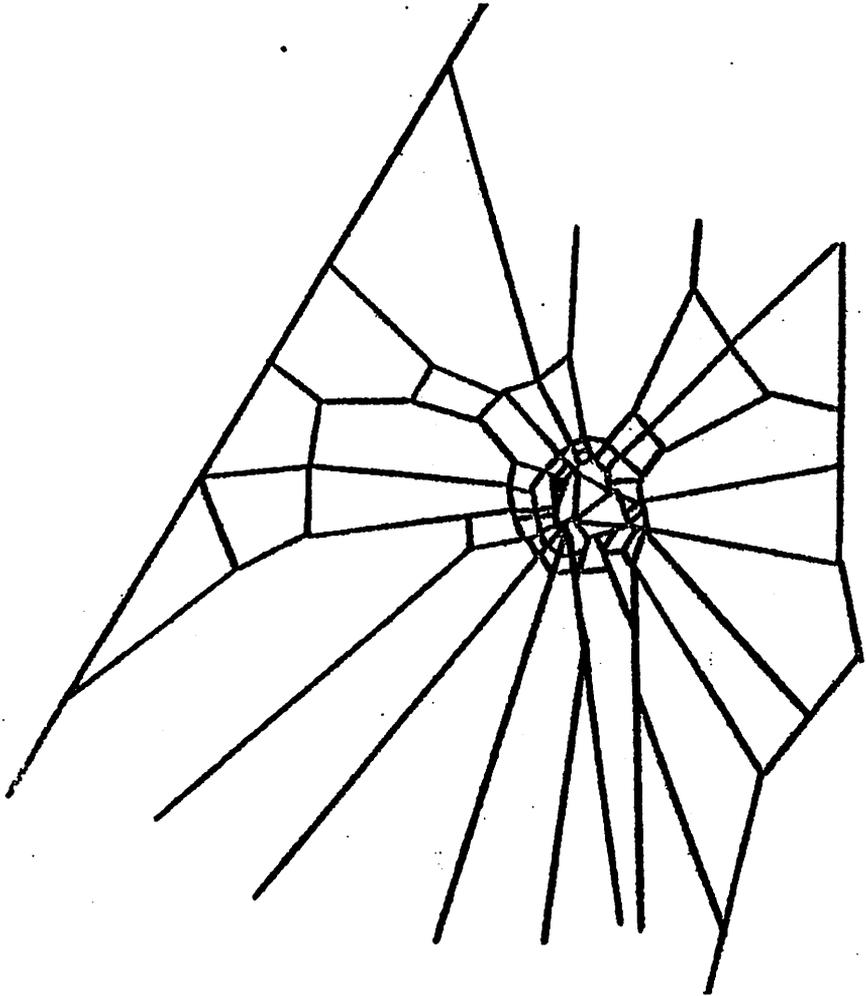
山 川 守

昭和48年3月16日、東京都町田市内で採集したオニグモ♀*y* (体長10mm) を円筒型飼育ビン (10×13.5cm) で飼育した。

そして、2回の脱皮を経て7月中旬成体 (体長25mm) になったので、自宅の庭に放したところ、極めて異常な網を張った。

その網は図のように横糸が無い網で、外わく、内わく、縦糸、としきだけで作られており、としき

異常な網 (写真に撮ったものを模写)



の部分を除き、その糸のすべてが粘糸であった。

昼間は網の一端の壁に潜っており、夜になるとこしきの部分に占座していた。

その網にアカピロウドコガネなどの昆虫をかけてやると、脚をもたつかせながら近づいて捕え、こしきの部分に戻って食べていた。

時間の関係で造網の過程を観察することができなかったが、毎日、網を作りかえていたようで、それが7日間続いた。

しかし、8日目からは他のオニグモとまったく同じ、正常な円網を作るようになった。

このオニグモは飼育ビン内ではずっと不規則な網を張り（無粘糸）、ハエなどをかけてやると、それを捕食して生活していた。

たった一つの観察例なのではっきりしたことは言えないが、約4ヶ月間狭い飼育ビン内で生活していたので、おそらく造網本能が狂い、このような異常な網を作ったものと思われる。

なお、飼育ビンでのオニグモの飼育は比較的簡単なので、機会がありましたら、皆さんも実験してみるとおもしろいと思います。

DRAGLINE

前号でお知らせした通り今回からクモ短信の頁をつくることになりました。Draglineとはクモが歩くときに必ず引いている糸でしおり糸と呼ばれているものです。報告されずに埋もれてしまいそうな小記録や考察など、クモに関する記事なら何でもどんどん載せていきたいと思います。葉書で結構ですので気軽に投稿して下さい。クモ愛好者を直接結ぶパイプラインともなれば幸いです。今回は原稿がまだ来ていないので、事務局への高橋米夫氏のおたよりの中から文章を拝借させて載せました。（編集者）

＜現在メガネヤチグモとタナグモの仲間と思われる蜘蛛を飼っています。プロヨを与えています。プロヨは一時に大量に手に入るので蜘蛛の餌に使っています。食欲は旺盛です。一匹をくわえてもう一匹をおっかけたりします。（中略）

八木沼先生の図鑑には蜘蛛を食用にする人達がいるとありますが、私が母から聞いた話では蜘蛛を食べると（ナベに間違っって入ったのを知らずに煮て食べると）全身に赤いポツポツが出来るとの事です。真偽のほどは分かりません。又、私の母は蜘蛛の犠牲者？のようです。父や母が田舎に住んでいた頃、夜、母は大きな蜘蛛を見たそうです。それを父に言くと「何を縛っている！」と一喝を食ったそうです。母の見たものは足のさしわたしが30cmもある足の細いフワフワ宙を浮くように歩く蜘蛛だったそうです。ザトウムシのような感じのようです。実際、そんな大きなザトウムシが日本にいるものかどうかわかりませんが（ザトウムシも一般には蜘蛛といわれているようです）、人間は自分の目の毛細血管を見ることがあると聞きます。母の見たものもそれかも分かりません。（高橋米夫）＞

オニグモの飼育について 〔日記をまとめつつの報告(1)〕

萱 嶋 泉

オニグモの網を調べるために、五日市町の広徳寺付近から27頭のオニグモの雌を採集して、わが家で飼育しはじめたのが、昨年5月3日であった。いずれも幼生で20cmから30cmの直径の網を張っていた。この広徳寺付近は日野市付近と少しく違って、オニグモの成育が良いように思った。

このオニグモを10頭飼育箱で飼育し、他は狭い庭に放って観察した。飼育箱は横30cm四角で縦50cmの割りに大きいものであるが、網を張るクモを飼育するには狭いものである、しかしきれいに丸網を張り、イエバエその他の昆虫をよく食べて、しだいに成育した。庭に放飼したものには、朝早くと夜間に野原より捕虫網で取って来た昆虫をあたえた。そのために逃げることなく、樹間や軒に網を張って生育した。このようにして屋外と屋内で生活しているオニグモを実験材料にして、50cm四角の木製の枠を作りこれに網を張らせて、調査をするのである。網を張るのに光は全くいらぬものか、風はなくてもよいか、張り始めから張り終るのにどれくらい時間はかかるか、足場糸、放射糸、渦糸、網の張力、網の粘着力、等と項目を分け、当日、翌日、に相違はあるかなどと調査することは仲々多くある。クモが健康体でなければ、その実験にも違いが出るので、充分に餌をあたえつつ飼育せねばならぬことが、いろいろの実験をしている中によくわかった。飼育箱での飼育は6月いっぱい止めた。それは、網が大きくなり、それぞれのオニグモが不自然な網を張りはじめたため、7月1日からは屋外に放った。7月になると27頭のオニグモは、行動範囲が広くなり隣家の庭や、軒にどんどん進出して大きい網を張るようになった。けれども頭数は減少しなかった。面白いことにどこから来たのか3頭の雄がそれらの27頭の網に混じって生活しはじめたことである。隣家の協力を得て夜間でも自由に観察に出かけたり餌をやり庭や家の軒に行けたので、元気な実験材料が何時でも得られたのは幸であった。

この枠に網を張らず実験も体長が2cm頃までで、2cmを超えると、もっと大きい枠を必要とすることを知った。そのため昨年も個体によっては、6月にはいると2cmを超えるものが出て枠の実験の出来なくなったオニグモが出た。しかしそれらは屋外で毎夜美しい網を張り、私の網の調査に役に立った。8月になると、電線と二階の軒との間に網を張るもの、隣家の二階と二階に張るもの、樹木と電柱、電柱とテレビのアンテナなどと、それぞれ高い所に移動し、調査に苦勞した。それで餌をあたえる方法をつぎのようにした。息子に強力な携帯用の懐中電燈で、光を網にあてさせ、その光のあたっている中に、捕虫網の中の昆虫をオニグモの網の近くで放つのである。2人の息子を連れて、夜間8時頃から野原に餌を集めに行き、大抵オニグモに餌をやるのは10時頃になった。幸に近くの野原にアレンチノギク、ヒメムカシヨモギ、セイダカアワダチソウ等が多くあるので、いろいろの蛾が捕獲出来た。その蛾類が後半のオニグモの主な食物となった。8月中旬に余り遠くに移動した3頭を、近く樹木に持って来て、右第1歩脚の腿節の基部に白糸をまき目じるしにした。もう脱皮は完了しているであろうと思ったから糸をまいたのであるが、3頭のうち1頭は9月にはいて、脱皮したその時その第1歩脚は脱皮が完全に出来ないで、畸形になった。また原因はよくわからないが9日に死んでしまった。(以下次号)

◎合同例会開催さる

昨年暮の12月27日(木)、目黒の大橋区民会館において多足類懇談会、ササラ会及び東京蜘蛛談話会の三合同例会が開かれた。当日は大阪から八木沼健夫先生の御出席もありがたいへん有益な会であった。参加者は32名、内容も多岐にわたって教えられること多大であった。クモだけでなく、時にはムカデやダニなどの近縁の動物群について幅広く色々知ることも実に有意義なことである。自己紹介の後、昼食をはさんで多くの興味ある講演があった。クモに関するものは次の3つである。

- 荻嶋 泉 マレー半島にクモを追って
- 小野展嗣 奥日光の真正蜘蛛類
- 新海栄一 クモのリスト作成上の問題点

また、八木沼先生からは最近のクモ学界の動向など興味あるお話を聴くことができた。

〈出席者〉(50音順) 青木淳一・赤間日吉・有馬恭子・阿部啓宏・五十嵐広明・石井清・大河内哲二・大利昌久・小野展嗣・加藤宏保・荻嶋泉・熊田憲一・栗原輝代子・近藤昭夫・斉藤博・篠原圭三郎・白井哲夫・新海明・新海栄一・鈴木恵一・高野光男・高橋登・田中理恵・茅根重夫・新島暎子・福山研二・古浜隆・松田まゆみ・松本誠治・八木沼健夫・山川守・渡辺やす子(以上32名)

◎国見裕久氏アフリカへ

本会会員国見裕久氏は去る4月20日(土)、ツエツエバエ研究の目的でアフリカのタンガニカ湖へ向い赴任されました。御研究の発展を祈りたいと思います。

◎観察採集会

別便(談話会通信)でお知らせした通り5月12日(日)、都下八王子城趾において蜘蛛観察採集会が行なわれた。今回は一般の方々にも呼びかけ、参加者は全部で20人、天候にもめぐまれて充実した一日を過ごすことができた。

◎お便りの中から

KISHIDAIA に Dragline という頁が設けられるとの事ですが、私のような蜘蛛に興味をもってまだ日の浅い者にとっては簡単な事でも分らない事がいっぱいあります。質問の頁など作っていただけると幸いです。

オオヒメグモの卵のうちより変な虫を見つけました。以前毛糸のセーターについていた虫に似ているようです。八木沼先生の図鑑によりますとカツオブシ虫が卵を食べるとありますが、出来ればKISHIDAIA にカツオブシ虫に関する記事をお願い致します。(高橋米夫)

~~~~~ 東京蜘蛛談話会のしおり ~~~~~

◎談話会小史

最近入会された方々のために東京蜘蛛談話会の沿革を紹介したいと思います。

東京近辺に住むクモを研究する学生が数人、毎月一回萱嶋泉先生のお宅に集まって、先生を中心に目を輝かせながらクモについて語り合っていた。そして毎回寄せ書を書いてクモを研究している方々へ送ったり、時折は採集に出かけたりしていた。今から7、8年前の話である。東京蜘蛛談話会はこうして生まれた。それから2年程した1968年10月4日、クモ学界の長老岸田久吉先生が突然逝去された折、談話会が先生の蔵書の整理にあたった。多くの蔵書の他にたくさんの未発表原稿が発見された。会誌発刊の話が持ち上がったのはその時である。名前はKISHIDAIAと決った。ブチワシグモ属の学名である。翌年1月さっそく第1号が発行され、その後毎月1冊ずつ刊行されていった。初めは岸田先生の蔵書目録、遺稿、それに一寸としたメモがその内容で、体裁もがり刷りであった。しかし、会誌を発行しATYPUSを通じて全国に宣伝されると会員も増え、談話会の性格も自ずと変わってきた。KISHIDAIAも10号あたりからタイプ印刷になり内容も豊富になっていった。そして1970年新しい談話会の方向づけが決定し本誌18号に「東京蜘蛛談話会の性格」として発表された。それによって談話会の活動はクモ愛好者の底辺を拡大すべく本誌発行の他、採集会や合宿例会など多方面に拡大されていった。それにともなって組織化が必要となり1972年には規約が定められた。そしてその後も着実に歩みを進めKISHIDAIAも今回で38号を数えた。1970年に30名余りだった会員数も今では倍の60名にのぼり、クモ愛好会として独自の道を開拓して行こうとしている。

◎年会費 700円。会員及び本会へのお問い合わせは下記会計事務宛お願いします。

◎各連絡場所

本 部	(本会代表者) : 191	日野市豊田1896	萱嶋泉方
会計事務	(会費受付) : 192	八王子市宮下町476	杏林大学内 松本誠治方
会誌発行事務	(原稿受付) : 211	川崎市中原区小杉町1-540	小野展嗣方

◎KISHIDAIA 投稿規定

内容：解説、記録、紀行文、感想などクモに関する原稿なら何でも結構です。(ただし原著論文は除く) 気軽に投稿下さい。

体裁：原稿用紙横書き。1頁あたり45字×35行です。DRAGLINE、会報の欄への投稿は葉書でも可。学名(属・種名)の下には赤線を引いて下さい。

図：挿図は略図、線画程度。図版は謄写ファックスですので原寸大(1頁あたり14×21cm)

で墨入れをして下さい。多少細めに書くときれいに印刷されます。写真は全額著者負担。

別刷：実費著者負担。必要部数及び表紙の要不要を明記して下さい。

受付：原稿は前頁の会誌発行事務宛お送り下さい。

編 集 後 記

先日、「クモは何回脱皮して親になるのか？」という質問をされて困った。仕方なく「まだよくわかっていないのです」と答えると相手は驚いていた。実際クモにはあたりまえのことで調べられていないことが多い。基礎的な観察を積み重ねそれらの空白をこのKISHIDAIAで少しずつでも埋めて行きたいと思う。

KISHIDAIA ㉞38

1974年5月30日印刷

編集者 小野 展 嗣

1974年5月31日発行

発行者 萱 嶋 泉

発行所 東京 蜘蛛 談話 会

〒 191 東京都日野市豊田1896 萱嶋 泉 方

PHONE 0425 (81) 7128

印刷所 東京都豊島区目白2丁目14-2 小山タイプ
